党の神話

社会革命は党やグループや幹部によって起されぬ、社会革命は国民の大部分を活性化する根深い歴史的諸力や諸矛盾の結果として起る。社会革命は、「大衆」が現存の社会を耐え難いと思うが故に起る（トロツキーの主張したこと）のみならず、現実性と可能性との間の緊張、存るものと存り得るものとの間の緊張の故にもまた起る。目もあてられない悲惨さのみが革命をつくり出すのではない。残るための私的な、つまり個人化された闘争をつくり出す。

一九一七年のロシア革命は、それが大部分「耐え難い諸条件」の産物、壊滅的な帝国主義戦争の産物であったが故に、生ける者の頭脳に悪夢の如く重くのしかかっている。ロシア革命がたとえどんな夢を持っていたとしても、その夢は流血の国内戦、飢きん、裏切り等によって事実上破壊された。ロシア革命から生じたものは、古い社会の崩壊ではなく、たとえどんな希望でも新たな社会を実現しようとして存在したものがあれば、それらの希望の崩壊であった。ロシア革命は悲惨にも失敗した―それはツァー主義を国家資本主義によって置換した。ボルシェヴィキは自らのイデオロギーの悲劇的な犠牲者達であった、そして一九三〇年代の粛清の間に、彼等は多くの生命をその代償として支払った。この貧窮革命から何か独特の知恵を得ようとする試みは馬鹿々々しい。我々が過去の革命から学び得ることは、すべての革命が共通に持つところのもの、及び今や我々に開かれていく莫大な可能性と比肩する程の過去のすべて

え、そこから補充されるところのまさにその世代をもまた味方に獲得する。過去の戦術ハンドブックを放棄して、未来の革命は「階級的地位」に関わりなく、国民のもっとも鋭敏な部分に革命の道を喰い込ませ、もっとも抵抗の少ない道をとる。未来の社会革命は単に一八六〇年代や一九一七年の矛盾からだけではなく、ブルジョア社会内のあらゆる矛盾から滋養を得ている。それ故、未来の社会革命は搾取、貧困、人種主義、帝国主義等の重荷を感じているすべての人々を惹きつけるし、そう、消費主義、郊外生活、マス・メディア、家庭、学校、スーパーマーケット、抑圧された性の現行のシステム等々によってその生活が、欲求不満にされているすべての人々もまた惹きつける。ここにおいて、革命の形態がその内容―無階級の、無所有の、無位階制の、そして全体的解放―と同様に總体的になる。

マルクス主義のすり切れた処方箋を持って、この革命の発展に無理矢理入ることは、「階級ライン」や「労働者階級の任務」についてべらべらしゃべることは、過去によって現在と未来を滅亡させるというに等しい。「幹部」、「前衛党」、「民主的中央集権主義」、「プロレタリアート独裁」等についてべらべらしゃべるることによって、この死にかかっているイデオロギーを念入りに取繕うことは、全くの反革命である。我々が今注意を向けねばならないのは、「組織問題」―レーニン主義がマルクス主義になした力強い貢献―である。

の革命の持つ深刻な制限である。

(注) これは、トロツキーがけっして理解しなかった事実である。

彼は「複合的發展」という自身の概念の諸結果をその論理的結論にまでけっして達せしめなかった。彼は、ヨーロッパのブルジョアの発展においては遅参者であるツァー主義ロシアが全ブルジョアの発展をその開始から繰り返さないで、もっとも進んだ産業形態と階級形態を必然的に獲得する、と(全く正しくも)理解していた。彼は、恐ろしい程の国内の大変動によって攪乱されたロシアが、ヨーロッパ中の資本主義発展の先端を行きさえるかも知れない、という考えを否定した。「国有化イコール社会主義」という公式に催眠術にかけられて、彼は、独占資本主義自身がそれ自身の内的弁証法によって「国家と融合する傾向を持つ」ということを認識するのに失敗した。ブルジョアの社会組織(それはヨーロッパやアメリカにおける国家資本主義発展に対する手綱としてなおも働いている)の伝統的諸形態を掃き捨ててしまつて、ボルシェヴィキは、その中で国家が遂に支配階級になるところの「純粋な」国家資本主義発展のための土俵を不注意にも準備した。工業技術的に発展したヨーロッパの支持を欠いていたので、ロシア革命は「一国的反革命になつた」ソヴェト・ロシアは「万人に利益を与え」ない国家資本主義の一形態となつた。「社会主義」と国家資本主義の間のレーニンのアナロジは、スターリンの下で戦慄すべき現実となつた。そのヒューマニスティックな核心にもかかわらず、マルクス主義は、「社会主義」というマルクス主義の概念が、いかに密接に後期の段階の資本主義自身に近似しているか―より高度の産業レベルでの重商主義形態への帰還―を

理解することに失敗した。この発展の理解の失敗は、現代の革命運動において壊滅的理論的混乱へ導いた、それはこの問題に対するトロツキスト間の分裂が証拠立てている。

過去の諸革命のもっとも顕著な特徴は、それらの革命が自然発生的に始まつた、ということである。人が一七八九年のフランス革命、一八四八年の革命、パリ・コミューン、ロシアの一九〇五年の革命、一九一七年のツァー政府の打倒、一九五六年のハンガリア革命、あるいはまた一九六八年のフランスのゼネ・スト等の初段階を調べるために、どれを選ぼうとも、初段階は一般的に同じである―発酵の時期が自然発生的に爆発して巨大な立ちに達する。そのわき立ち(蜂起)が成功するかどうかは、その決然性、及び軍隊が人民の側につくかどうかにかかっている。

「栄光ある党」は、それが存在する時には、ほぼいつも事変に追い越される。一九一七年二月に、ボルシェヴィキのペトログラード組織は、ツァー政府を打倒するべく運命づけられていた革命のまさに直前に、ストライキの呼びかけに反対した。幸運にも、労働者はボルシェヴィキの「指令」を無視した、そして何としてもストライキを続行した。引き続いて起つた事態では、誰もが革命によってよりはむしろ、ボルシェヴィキも含む「革命的」諸党によって驚かされた。それはボルシェヴィキの指導者カエロフが次のように想起したことである。「絶対にかなる指導的イニシヤティブも党からは感じられなかった。……………。ペトログラード委員会の委員は、逮捕されてしまつていたし、中央委員会からの代表である同志シリアブニコフは来るべき日のための何らの指令も与えることができな

った。」(トロツキー『ロシア革命史』よりの引用)多分この事は幸運であった。ペトログラード委員会の委員が逮捕されるまでは、委員会の情況判断や委員会自身の役割が非常に暗いものだったので、もし労働者が委員会の指導に従ってしまっていたのであったならば、革命は、それが実際に起ったように起っていたかどうかは疑わしい。

同じ種類の話は、一九一七年に先立つ諸蜂起、及び一九一七年以後に起った諸蜂起——最近では、一九六八年五月—六月の間のフランスにおける学生蜂起とゼネ・ストを挙げることができる——についても語り得る。当時(一九六八年五月—六月)パリには「ダースに近い」厳格な中央集権的「ボルシェヴィキ型組織が存在していた」ということを忘れてしまふ都合のよい傾向がある。街頭戦がもつとも熱烈に戦われた五月七日までは、これらの「前衛」グループの事実上あらゆる者が学生蜂起を侮蔑した、ということとはめつたに注目されなかつた。トロツキー主義の革命的共産主義青年同盟(JCR)が注目に値する例外であつた——そして、JCRは三月二二日運動のイニシヤティブに単に同伴し、基本的にそれにつき従つた。五月七日までは、すべての毛主義グループが学生蜂起を皮相的且つ非重要として批判した——トロツキー主義の革命的學生連盟(FER)は学生蜂起を「冒険主義的」と看なし、五月十日に、學生にバリケードを放棄させようと試みた——共産党は、勿論、完全に裏切りの役割を演じた。大衆運動を導くこととはおよそかけ離れて、毛主義者やトロツキストは一貫して大衆運動の虜囚であつた。皮肉にも、これらのボルシェヴィキ諸グループのほとんどは、ソルボンヌの學生集會エッセイでそれを「支配」しようとして厚顔無恥にも操作技術を用いた、そしてその結果、ソルボンヌ學生集會の完全な組織体を混乱させた分

のバリにおけるゼネ・ストとして再現した。^(注)

(注)一部分は無知のためにおこなうことであるが、途方も無く尊大ぶつて、マルクス主義の幾多のグループが、自己管理の上記の事実上すべての形態を「ソヴィエト」として仕立て上げねばならなかつた。これらの異つた形態のすべてを単一の項目に入れる試みは、誤りに導くのみならず、意図的な曖昧主義である。実際のソヴィエトは、革命的諸形態の中でもっともデモクラティックでないものであつたし、ボルシェヴィキは権力を自身の党に移行させるために、抜け目なくソヴィエトを利用した。ソヴィエトは、(フランス革命期の)パリの区、あるいは一九六八年の學生集會のような顔と顔のデモクラシーに基づいていなかつた。かつまた、ソヴィエトは、スペインのアナキストの工場委員会のような経済的自己管理にも基づいていなかつた。ソヴィエトは、実際には、位階制的に組織された労働者議會を形成した。この議會はその代表を工場から、後には軍の各部隊、農村等からも選んだ。

この辺で我々は、「革命」党がこれらのあらゆる発展において、どんな役割を演じるかを問わねばならない。初めに、我々がすでに見てきたように、「革命」党は、「前衛」の役割ではなく、阻止的な機能を持つ傾向がある。「革命」党が影響力を発揮するところでは、党は革命的諸力を「調整」するのではなく、事変の流れを鈍らせる傾向がある。これは偶然ではない。党は、自身が反対であると公言するまさにその社会を反映するところの位階制的線にそつて構成されている。党の理論的な主張にもかかわらず、党は、その機能

裂的空氣を持ち込んだ。最後に、この皮肉の仕上げでもあるまいが、これらのボルシェヴィキグループのすべては、大衆運動——ボルシェヴィキの「指令」にもかかわらず、またしばしばこれらの諸グループに反対して起つた運動——が挫折した時に、「中央集権的指導部」の必要についてべらべらしゃべらねばならなかつた。

(注)三月二二日運動は事変において指導部としてではなく、触媒的力として機能した。それは命令しなかつた——それは扇動し、事変を自由な活動のままにしておいた。學生自身の勢いによつて、學生が先端におどり出ることを許したこの自由な活動は、蜂起の弁証法には必要不可欠であつた、なぜなら、それがなければ、次には労働者のゼネ・ストを触発した五月十日のいかなるバリケードもなかつたであろうから。

何らかの注目に値する革命や蜂起はすばらしくアナキイである初段階を持つのみならず、革命的自己管理の独特の諸形態を自然発生的に創出する傾向さえもある。一七九三年—一七九四年のパリの区は歴史上の社会革命のどれかによつて創出されるべき自己管理の最顯著な形態であつた。(『自由の形態』参照)ペトログラードの労働者が一九〇五年に確立した評議會、つまり「ソヴィエト」が、形態においてよく似ていた。区よりも民主的ではなかつたけれども、評議會はその後の幾多の革命において再現することとなつた。革命的自己管理のなもう一つの形態は、一九三六年のスペイン革命において、アナキストが確立した工場委員会であつた。最後に、区は五月—六月の蜂起における學生集會や行動委員会、及び一九六八年

が権力を分解、消滅させることではなく、権力を掌握することである装置や幹部を持ったブルジョアの組織体、小国家である。前革命期に根づいてるので、党は官僚制のあらゆる形態、技術、精神等を同化する。黨員は服従と硬直したドグマの先入観とで鍛えられ、指導部を崇拜することをたたく込まれる。党の指導部が、今度は、命令、權威、操作、病的自負心等から生じた習性で鍛えられる。この事態は、党が議會選挙に参加する時、一層悪化する。選挙運動において、前衛党は完全に現存するブルジョアの形態で自身を型づくる。さらに選挙党の調度品を得さえする。事態は、党が多くの印刷所、費用のかかる本部、中央で統制される定期刊行物の大きな明細目録に記した物品等を押える時、さらに有給の「装置」(党内諸機関)を発展させる時——要するに、既得の物質的利権を伴つた官僚制を発展させるとき——真に危機的な形をとる。

党が拡大するに従つて、指導部と下部層との距離はいつも増大する。党の指導者達は「名士」になるのみならず、彼等は社会の基底での生きた情況との接触を失う。自らの直接的情況を遠隔の指導者の誰よりもよく知っている地方グループは、自らの洞察を上部からの指令の下位に置くことを強制される。地方の諸問題についてのいかなる直接的知識も持っていない指導部は、ぐずぐずと、用心深く返答する。指導部は「大局観」とか大きな「理論的能力」とかを独占的に主張するけれども、指導部の能力は、命令の位階制を昇るに従つて減少する傾向にある。実際の諸決定が下される位階制のレベルに近づけば近づく程、決定を下す過程の性格は益々保守的になり、作用し始める諸要因は益々官僚的に、益々本質に無関係になり、威信と節度の顧慮が創造力、想像力、革命目標への私心のない献身等

を益々押しつけ、それらに取って代る。

党が位階制、幹部、中央集権化等の手段で有効性を追求すればするほど、党は革命的観点からは益々有効でなくなる。あらゆる人は足並をそろえて行進するけれども、命令は、特に事態が急速に動き始め、予期せぬ変化をする—これらはあらゆる革命で起ることではあるが—時に、常に誤っている。党は唯一の点—もし革命が成功するならば、社会を党自身の位階制的イメージに形づくること—でのみ効果的である。党は官僚制、中央集権化、国家等を再び創出する。党は官僚制、中央集権化、国家等を育成する。党はこの種の社会を正当化するまさに社会的諸条件を育成する。それ故、「栄光ある党」によって支配された国家は、「死滅する」のではなく、国家の存在—そして国家を「守護する」—党の存在—を「当然必要とする」ところのまさに諸条件を保存する。

他方、この種の党は抑圧の時期には極度に傷つけられ易い。ブルジョアジーは事実上運動全体を破壊するために、党の指導部を奪いさえすればよい。党の指導者達が囚われたり、監禁されたりすれば、党は麻痺するようになる—服従的な党員は服従すべき（指導）者が誰もいなくなり、まごつき勝になる。士氣阻喪が急速に起る。党は抑圧的情況の故のみならず、党の内的諸方策の貧困の故にもまた分解する。

前述の説明は、一連の仮説的な推論結果ではなく、それは前世紀的なあらゆる大きなマルクス主義諸党—社会民主党、共産党、セイロンのトロツキー主義党（この種の党では唯一の大きな党）—の各種の要素を含めた複合的なスケッチである。これらの諸党が、真剣にマルクス主義の諸原理に従うことに失敗したと主張することは、

化への傾向に対する赤軍内で展開された反対運動については、言わねばならない。ボルシェヴィキ党の完全な中央集権化—後に「レーニン主義的統一」の達成と呼ばれる運命にあったもの—は一九二一年までは起らなかった。その一九二一年に、レーニンは第十回党大会で党内分派の禁止を議決させることに成功した。この時まで、白軍のほとんどは壊滅させられてしまい、外国の干渉主義者は、その軍隊をロシアから引き上げてしまっていた。

ボルシェヴィキが、労働者階級から遊離するようになる程にまで党を中央集権化する傾向にあった、ということはいささか強く主張されるはずがない。レーニンはこの関係性を認めるのに十分な程正直であったけれども、この関係性は後期のレーニン主義サークルにおいてははめつたに調査されることがなかった。ロシア革命の歴史は、単にボルシェヴィキ党や党の支持者達の歴史なのではない。ソヴェエトの歴史家達によって叙述された公的事象の虚飾の裏に、他の、一層基礎的な展開—後にボルシェヴィキの官僚政治と鋭く衝突した労働者や革命的農民の自発的な運動—があった。一九一七年二月のツァー政府の打倒とともに、ロシアの事実上あらゆる工場の労働者は、自発的に工場委員会を確立し、工場の管理運営を益々強く要求した。一九一七年六月に、「生産と分配に対する労働者による支配を通しての組織化」を要求した全ロシア工場委員会協議会が、ペトログラードで開催された。協議会が自己をボルシェヴィキと同一線上に並べた、という事実にもかかわらず、この協議会の要求は、ロシア革命のレーニン主義的説明においてはめつたに注目されない。工場委員会を「全国のプロレタリアートのもの」とも直接的且つ明白な代表」として叙述するトロツキーが、彼の大部の『ロシア革命史』

他の問題—先ず第一になぜこの失敗が起ったか—を単におおひ隠すだけである。事実上、これらの諸党がブルジョア的線にそって構成されていたが故に、これらは選出されてブルジョア社会に入った、ということである。裏切りの胚種は生れながらにこれらの諸党内に存在していた。

ボルシェヴィキの党は唯一の理由—この党は革命へ導く数年のほとんどの期間、非合法組織であった—のために一九〇四年と一九一七年の間この運命にあわずに済んだ。ボルシェヴィキの党は粉砕されることと再建を連続的に繰り返した、その結果、党が権力を取るまでは、党は決して十分に中央集権的、官僚的、位階制的機械（組織）に実際には固まらなかった。さらに、ボルシェヴィキの党は、党内闘争によってふるいにかけられた—特に強い党内闘争の情況は、一九一七年中から国内戦の時期まで持続した。にもかかわらず、ボルシェヴィキ指導部は通常極度に保守的であった。それは、レーニンが一九一七年中開かねばならなかった特性であった—最初は臨時政府を打倒する方向に中央委員会を向き変えさせる努力（「四月テーゼ」に対する有名な衝突）において、後には中央委員会を十月の反乱に駆りたてることにおいて。両方の場合とも、レーニンは中央委員会から辞任し、自らの意見を「党の下部層」に持ち込むことで中央委員会に脅威を与えた。

一九一八年に、ブレスト・リトフスク条約をめぐる党内闘争は、非常に深刻であったので、ボルシェヴィキはほとんど敵対する二つの共産党に分裂せんばかりであった。民主的中央集権主義派、労働者反対派等のようなボルシェヴィキ反対グループは、一九一九年と一九二〇年中党内で激しい闘争をきた。トロツキーの中央集権

においては、工場委員会を皮相的に処理している。それでも、これらの自己管理の自発的有機的組織体が、非常に重要だったので、一九一七年の夏ソヴェエトで勝利する望みをなくしたレーニンは、「全権力をソヴェエトへ」のスローガンを捨て、「全権力を工場委員会へ」に代える覚悟をさせられた。この要求はボルシェヴィキを完全なアナールコルサンジカリズムの位地にはじき出しただろう。もともと、ボルシェヴィキが非常に長くその位地にとどまっていただろう、ということはいけいけれども。

十月革命とともに、すべての工場委員会は、工場設備の支配を掌握し、ブルジョアジーを追い出し、完全に産業の支配力を得た。労働者管理の概念を受け入れることによって、一九一七年十一月十四日のレーニンの有名な布告は、成就した事実を単に認めるだけであった—ボルシェヴィキは、革命のこの初期には、あえて労働者に反対するだけの勇気がなかった。しかし、ボルシェヴィキは工場委員会の権力をそぎ始めた。労働者管理を布告したときから僅か二カ月足らずの一九一八年一月に、レーニンは、工場の管理運営が労働組合の支配下に置かれるべきだと主張し始めた。ボルシェヴィキが労働者管理を「忍耐強く」実験し、その結果、労働者管理が「非効果的」であり、「大混乱に陥っている」ことが解つただけである、という説は神話である。ボルシェヴィキの「忍耐」は数週間以上は続かなかつた。レーニンは十一月十四日の布告の後、もの数週間以内に直接的労働者管理に反対したのみならず、労働組合管理でさえも、それが確立されてしまつて後、すぐに終りをむかえた。一九一八年の夏までには、ロシアのほとんどすべての産業は、ブルジョア的形態の経営管理の下に置かれてしまつた。レーニンはそれを次の

ように言い表わした。「革命は、労働者大衆が労働過程の指導者の単一の意志に議論の余地なく服従する、ということをもまさに社会主義の利益のために……要求する。」この後、労働者管理は「非効果的」、「混乱に陥いる」、「非実際の」としてのみならず、「ブチーブル的」としてもまた公然と非難された。

(注) V・I・レーニン、『ソヴィエト政府の当面の諸任務』(レーニン選集、第七巻、国際出版、一九四三年、ニューヨーク)一九一八年に出版されたこの荒削りの論文で、レーニンは、彼が前年、『国家と革命』で発展させてしまっていたリバタリアンの展望を完全に放棄した。この論文の主要テーマは「規律」、工場に対する権威主義的支配、テイラー・システムの制度(レーニンが革命前に人間を機械に隷属させるものとして公然と非難してしまっていたシステム)等の必要である。この論文は、プレスト・リトブスク条約の締結のおよそ二カ月後、ウラル地方におけるチェコ軍の反乱(国内戦を大規模化するスタートとなり、ロシアへの連合国の直接干渉の時期を開始した反乱)の一カ月前の、ボルシェヴィキ支配の比較的平和な時期に書かれた。最後に、この論文はドイツ革命の敗北のほぼ一年前に書かれた。『当面の諸任務』を単にロシア国内戦争、及びヨーロッパ革命の失敗の点からのみ説明することは困難であろう。

左翼共産主義のオシンスキーは、これらすべての偽の主張を攻撃し、党に警告した。「社会主義と社会主義的組織はプロレタリア自身によって創設されねばならない、さもなくば、社会主義と社

い。要点は、これらのコンミュニオンが真正の大衆的有機的組織体、つまり、ブルジョア社会の人間性を失わせる価値を超えてはるか遠くまで達する道徳的且社会的精神の核であった、ということである。ボルシェヴィキはまさに初めから、これらの有機的組織体に顔をしかめ、事実上これらの組織体を非なり、とした。レーニンにとつては、より好ましい、より「社会主義的」形態の農業経営は国营農場(そこでは国家が土地と耕作機械装備を所有し、賃銀ベースで農民を雇う経営管理人を任命する)の農業工場によって示された。労働者管理や農村コンミュニオンに対するこれらの態度の中に、誰でも、ボルシェヴィキ党に浸透した本質的にブルジョア的心と精神性(ボルシェヴィキ党の理論からのみならず、その党の集中的様式の組織からもまた発する心と精神性)を見る。一九一八年十二月に、レーニンは、農民がコンミュニオンに加入するべく「強制され」ている、という口実のもとに、コンミュニオンに対する攻撃を開始した。実際には、これらの自己管理のコンミュニオンの形態を組織するのに、強制威圧はほとんど用いられなかった。ソヴィエトのコンミュニオンを詳細に研究したロバート・G・ウェソソフが次のように結論している。「コンミュニオンに加入した人々は、大部分、自らの自由意志で仕事をしなければならなかった。」(『ソヴィエト・コンミュニオン』)

コンミュニオンは、スターリンが二〇年代の終りと三〇年代の初めの強制的集産化攻勢の中にコンミュニオンの発展全体を没せしめるまでは、鎮圧されたのではなく、コンミュニオンの成長はむしろ勇気づけられた。

一九二〇年までには、ボルシェヴィキはロシアの労働者階級や農民から遊離してしまっていた。労働者管理の消滅、マフノー運動の

会主義的組織は、全然創設されないだろう。何か他のものが創設されるだろう(つまり、国家資本主義)。(オシンスキー『社会主義の建設』)「社会主義の利益」によって、ボルシェヴィキ党は、プロレタリアートが自らの努力とイニシヤティブで征服してしまっていたあらゆる領域の外へプロレタリアートを押し出した。党は革命を調整しなかった、いや、革命を導きさえしなかった。党は革命を支配した。初めに労働者管理が、後に労働組合管理が、前革命時代に存在したどんな構造体とも同様、怪物のような手の込んだ位階制によって置き換えられた。後年、オシンスキーの予言は現実になつた。

「誰が支配的であるべきか」(ボルシェヴィキか、それともロシアの「大衆」か)の問題は、決して工場に限定されるものではなかった。その問題は、都市は勿論農村においても再出現した。大々的な農民戦争は労働者の運動を浮き上らせてしまっていた。公式的なレーニン主義の説明とは反対に、農民の蜂起は決して私有の小土地への土地の再分配に限定されるものではなかった。ウクライナ地方では、ネストル・マフノーのアナキスト軍によって影響され、共産主義的金言「各人からは各人の能力に従って」各人へは各人の必要に従って」によって導かれた農民は、多種多様な農村コンミュニオンを確立した。他の地方、北部やソヴィエト・アジアにおいては、数千のこれらの組織体が、一部は左翼社会革命党のイニシヤティブに基づいて、大部分はロシアの農村、すなわちミール、から生じたところの伝統的集産主義的衝撃の結果として、確立された。これらのコンミュニオンがおびただしい数であったかどうか、あるいは非常に数多くの農民を包含していたかどうか、ということは大した事ではな

鎮圧、慢心した官僚制、国内戦の時代から引き継いだ散々な物質的貧困、国中の閉塞的政治情况等が一緒になって、ボルシェヴィキ支配に対する深い敵意を生み出した。敵意の行きつくところ、一運動がロシア社会の基底から「第三革命」(ボルシェヴィキが要求した如く過去に戻るのではなく、一九一七年のボルシェヴィキのプログラムの周囲に大衆を集中していたところの政治的は勿論、経済的自由のまさに目標を実現する「第三革命」)を求めてわき上った。この新たな運動は、ペトログラードのプロレタリアートの中に、クロンシュタットの水兵の間に、そのもつとも意識的な形態を得た。この新たな運動はまた党内にも現われた(ボルシェヴィキ内の反中央集産主義傾向及びアナナルコルサンジカリズム傾向の成長は、反対諸グループのプロックがモスクワ地方協議会で中央委員会の支持者の一五四議席に対して一二四議席を占めるまでになっていた)。

一九二一年三月二日に、クロンシュタットの「赤軍水兵」は公然と反乱に立ち上り、「こつこつ働く人達の第三革命」の旗をかかげた。クロンシュタットのプログラムは、ソヴィエトの自由選挙、アナキストや左翼社会主義諸党のための言論と出版の自由、自由労働組合、社会主義諸党に所属するすべての囚人の解放等の要求の周囲に集中した。もつとも破廉恥な話が、この蜂起を説明するためにボルシェヴィキによって捏造された。この破廉恥な話は後年鉄面皮な嘘であると解った。反乱は、クロンシュタットの共産党員の大部分が党の指導者達を十月革命の裏切り者として公然と非難して、水兵と一まさに共産主義者として一連合した、という事実にもかかわらず、「白軍の計略」として性格づけられた。ロバート・ヴィンセント・ダンニエルがボルシェヴィキ反対運動に関する研究において、次

のように述べている。「一般の共産主義者は、実際、非常に当てにならなかつたので……、政府はクロンシュタットの攻撃でも、またクロンシュタットの支援の希望が主要にかかつていたベトログラーの秩序を保つことでも、彼等共産黨員に依存することができなかった。攻撃軍の主力隊はチエーカと赤軍養成所の士官候補生であった。クロンシュタットへの最終的突撃は、共産党の高級役員によつて指揮された第十回党大会への大派遣団が、この目的のためにモスコから急遽帰された。」（『革命の良心』）体制は内部的には非常に弱かつたので、エリートが自らの穢らしい仕事を手を汚さねばならなかつた。

ベトログラーの労働者の中で発展したストライキ運動、すなわち水兵の蜂起を発火させた一運動は、クロンシュタットの反乱よりも一層意義深くさえあつた。レーニン主義の歴史家はこの極めて重要な発展を語らない。最初のストライキは、一九二一年二月二三日にトロウボチニイ工場で爆発した。ものの数日内に、運動は一工場から他工場へと波及し、ついに二月二十八日までには有名なブチロヴ工場「革命のつば」がストライキに入った。経済的要求がかげられただけではなく、労働者は、数日後クロンシュタットの水兵によつてかかげられる運命にあつたあらゆる要求を予期させる政治的要求も明確にかかげた。三月二四日に、ボルシェヴィキはベトログラーの「包圍攻撃の状態」を宣言した、そして、ストライキ指導者達を逮捕し、労働者のデモを士官候補生を使つて鎮圧した。ボルシェヴィキは単に「水兵の暴動」を鎮圧したのみではなく、ボルシェヴィキは労働者階級自体を粉砕した、ということが事実である。レーニンがロシア共産党内の分派の禁止を要求したのは、この

る。レーニンは中央委員会を拡大することを主張する。このようにして、それは次のようになる。変るようになる。拡大されるべきこの組織体、他と合併されるべきあの組織体、修正されるべき、また廃棄されるべきさらに第三の組織体等々と。問題があたかも組織的手段によつて解決され得るかのよう、組織形態の奇妙なパレエがまさにレーニンの死に至るまで続くことになる。それは、レーニンの明白な称賛者であるモシユ・レウインが次のように認めているごとくである。ボルシェヴィキの指導者は、「むしろ確固とした『エリート主義的』傾向の精神を持つ会社の高業務執行者のように、統治機関の諸問題にアプローチした。彼（ボルシェヴィキ指導者）は社会分析の方法を統治機関に適應しなかつたし、それを純粹に組織的方法の点からのみ考慮して満足した。」（『レーニンの最後の斗い』）

もしブルジョア革命においては、「文句が内容にまさつた」ということが真実であるならば、ボルシェヴィキ革命においては、形式が内容に取つて代つた。ソヴィエトが労働者と工場委員会に取つて代り、党がソヴィエトに取つて代り、中央委員会が党に取つて代り、党政治局が中央委員会に取つて代つた。要するに、手段が目的に取つて代つた。この内容に対する形式の信じ難い代替は、マルクス・レーニン主義のもつとも顕著な特徴の一つである。五月一六月事変の期間、フランスにおいては、すべてのボルシェヴィキ的組織は、組織の影響力と組織を拡大するためには、ソルボンヌ学生集会を破壊する覚悟をしていた。それらの組織の原則的関心は革命、もしくは、学生によつて創出された真正の社会形態ではなく、自らの党の成長であつた。

時点であつた。党の中央集権化は今や完全であつた。そして、道はスターリンのために掃き清められた。

我々は、これらの出来事が、マルクス・レーニン主義者の最近の著作物が次のこと「ボルシェヴィキ党は革命を達成したり、白軍の反革命を抑圧したりするためではなく、党が代表すると公言したまさに社会的諸力に反する党自身の反革命を効果的にするためにレーニンの時代に最高度の中央集権化に達した」とを避ける傾向にある、という結論に導くが故に、これらの出来事を詳細に論じてきた。党内分派は禁止された、そして、一枚岩の党は「資本主義の復活」を妨げるためではなく、ソヴィエトの民主制と社会的自由を要求する労働者の大衆的運動を抑えるために創られた。一九二一年のレーニンは一九一七年のレーニンに對立する位置にいた。

この時以後、レーニンは単にあがくだけだつた。何にもまして、党の諸問題を社会的諸矛盾に垂を降しているものとして追求したこの男は、自身が創出してしまつたそのまさに官僚化を阻止する最後のどんづまりの試みにおいて、自身が組織的「ナンバーズ・ゲーム」に文字通り興じているのを知つた。レーニンの晩年ほど哀れを誘うもの、悲劇的なものはない。マルクス主義の公式の一枚岩の組織体によつて麻痺させられて、レーニンは組織的諸対策よりもすぐれたいかなる対策も考えることができなかつた。レーニンは党と国家の官僚的ひずみを正すために「労働者、農民による検閲」組織の形成を企てる。そして、この組織体はスターリンの支配下に入り、組織体自身の権利で高度に官僚的になる。レーニンはその時、「労働者、農民による検閲」組織の規模が減せられるべきこと、及び「労働者、農民による検閲」組織が統制委員会と合併されるべきことを示唆す

唯一の力のみがロシアにおける官僚制の成長を阻止してしまふことができたであろう。つまり、社会的力がそれである。もしロシアのプロレタリアートと農民が力強い工場委員会、農村コミューン、及び自由ソヴィエト等の発展を通して自己管理の領域を拡大することとに成功してしまつたのであつたならば、この国の歴史は劇的に異つた方向をたどつていたであろう。第一次世界大戦後のヨーロッパにおける社会主義革命の失敗が、ロシア革命の孤立化を導いた、ということとは疑う余地がない。ロシアの物質的貧困が、ロシアを包圍する資本主義諸国の圧力と結び合つて、社会主義的社会、あるいは確固としたリバータリアン社会の発展の明白な妨げとなつた。しかし、ロシアが国家資本主義的方針にそつて発展しなければならなかつた、ということとは決して運命的に定められていたわけではなかつた。レーニン及びトロツキーの当初の期待とは反対に、革命は外国軍の侵略によつてではなく、国内的諸力によつて敗北した。もし下からの運動が、一九一七年の革命が当初に達成したものを復活してしまつたのであつたならば、多面的な社会構造が、産業の労働者管理、農業における農民経済の自由な発展、諸觀念、諸プログラム、諸政治運動等の相互働きかけ等々に基づいて発展していただろう。少なくとも、ロシアは全体主義的な鉄鎖にながれてしまふことはなかつたであろうし、スターリン主義が世界革命運動を毒し、その結果、ファシズムと第二次世界大戦のために道を掃き清めることもなかつたであろう。

しかしながら、ボルシェヴィキ党の発展が、この発展をばんだーレーニンとトロツキーの「十分な注意」にもかかわらずである。産業における工場委員会の権力を破壊することによつて、また、マ

フノー運動、ペトログラドの労働者、クロンシュタットの水兵を粉砕することによって、ボルシェヴィキはロシア社会を支配するロシア官僚制の勝利を事実上保証した。中央集権化された党—完全なブルジョアの制度—は、もともと醜悪な形態における反革命の保護物となった。これは、赤旗とマルクスの専門用語で飾り立てられたところの人を眩惑させる反革命であった。結局、ボルシェヴィキが一九二一年に鎮圧したものは、「イデオロギー」あるいは「白軍の陰謀」ではなく、自らの手かせ足かせから自らを解放し、己自身の運命を支配するためのロシア人民の本質的な斗争であった。^(注)ロシアにとっては、これはスターリン主義の独裁を意味した。三〇年代の世代にとっては、それはヨーロッパ及び合衆国におけるファシズムの恐怖と諸共産党の裏切りを意味した。

(注) ロシア労働者及び農民のこの本質的運動を一連の「白軍の陰謀」、「クラークの抵抗行動」、「国際資本の計略」等と説明することによって、ボルシェヴィキは信じ難い理論的低速をきたし、ボルシェヴィキを除いて誰一人として欺くことができなかつた。秘密警察の政策、人身攻撃、そして、遂にモスコイ裁判と古参ボルシェヴィキ幹部の全滅等のための道を掃き清めたところの精神的腐食が党内に発達した。誰でも、この醜悪な精神性の繰り返しを『マルク—ゼー—逃がすべきか、捕えるべきか』—マルク—ゼーをCIAの手先としてきめつけるのがそのテ—マ—のようなPLPの論文において見る。(一九六九年二月号『進歩的労働者』を見よ)この論文は、デモをしているパリ人の写真の下に、「マルク—ゼーはパリに着くのがあまりに遅すぎたので、五月の行動を止めることができなかつた」

の要求が軽くとられるのを恐れて、その要求は、「一七九三年のフランスにおけると同様に、今日ドイツにおいても最も厳格な中央集権化の貫徹が真に革命的な党の任務である」、という結論になる同じ節で連続して繰返されている。

同じテ—マは後年にも続いて再出現する。例えば、普仏戦争の勃発とともに、マルクスはエンゲルスに次のように書き送る。「フランス軍はむち打ちを必要としている。もしプロシヤ軍が勝つならば、国家権力の中央集権化はドイツ労働者階級の中央集権化に有益となるだろう。」

しかしながら、マルクスとエンゲルスは、彼等が中央集権化の長所をそれ自体で信じたが故に、中央集権主義者ではなかつた。全く反対である—マルクス主義とアナキズムは伴に、解放された共産主義社会が徹底的な非中央集権化、官僚制の分解消滅、国家の廃絶、巨大都市の解体等を必然的に伴う、ということに常に賛成してきた。エンゲルスは『反デュ—リング論』で記している。「都市と農村の対立の廃絶は単に可能であるのではない。それは直接的な必要となつてしまった。……空気、水、土地等の現在の有毒状態は都市と農村の融合によってのみ終らせられ得る……」。エンゲルスにとっては、この事は「国中への人口の均一的分布」—要するに、都市の物理的な非集中化—を意図している。

マルクス主義的中央集権主義の起源は、国民国家の形成から生ずる問題にある。十九世紀のかなり後半に入るまで、ドイツ及びイタリアは多くの公爵領、公国、王国等に分割されていた。マルクスとエンゲルスは、これらの地理的諸単位を統一国家に統合することが近代産業と資本主義の発展のためには必要不可欠のことであると

と読める説明文を載せている。PLP(進歩労働党)の反対者達はいつもこのぼろ機関誌によって「赤狩り者」とか「反労働者」として描かれる。もしアメリカの左翼がこの警察的アプローチと人身攻撃を拒絶しないならば、アメリカの左翼は将来苛酷な代償を支払うことになるだろう。

二つの伝統

レーニン主義がたった一人の男の産物であった、と考えることは信じ難く愚直なことであろう。病弊はもっと深く、マルクス主義理論の限界のみならず、マルクス主義をつくり出した社会の時代の限界にもまた存在する。もしこの事が明確に理解されないならば、我々は、マルクス、エンゲルス、レーニン、トロツキー等がそれぞれの時代にそうであったのと同様に、今日の諸事変の弁証法に盲目のままにしているだろう。我々にとっては、この盲目は、我々の背後にこれらの人々がそれぞれの理論を発展するに際して欠如していた豊富な経験が存在するが故に、かえって責むべきものとなるだろう。

カール・マルクスとフリードリッヒ・エンゲルスは中央集権主義者—政治的にのみならず、社会的にも、経済的にも—であった。彼等は決してこの事実を否定しなかつたし、彼等の著作は政治的、組織的、経済的中央集権化への熱烈な賛辞をちりばめている。早くも一八五〇年三月に有名な『共産主義者同盟への中央委員会の建言』において、彼等は労働者に「単一不可分のドイツ共和国のために奮闘するのみならず、その中で国家権威の手の中に権力をもっとも決定的に集中するためにもまた奮闘する」ように呼びかけている。そ

信じた。彼等の中央集権主義の賛美は、どんな中央集権主義的神秘化によっても生み出されたのではなく、彼等が生きていた時代の諸事象—工業技術、貿易、統一的労働者階級、国民国家等の発展—によって生み出された。この点での彼等の関心は、要するに、資本主義の発現、不可避的な物質的貧窮の時代におけるブルジョア革命の任務であった。他方、「プロレタリア革命」へのマルクスのアプローチは著るしく異なっている。彼はパリ・コミューンを「フランスのあらゆる産業中心地に対するモデル」として熱狂的に賛美する。彼は書いている。「この体制がパリに次ぐ諸産業中心地で一度確立されたからには、旧い中央集権的政府は諸地方においても、また生産者の自己統治に道を譲らねばならないだろう。」(傍点筆者)国民の統一は、確かに、消滅しないだろうし、中央政府は共産主義への過渡期に存在するだろう、がしかし、その機能は制限されるだろう。

我々の目的はマルクス及びエンゲルスからの引用を言いふらすことではなく、マルクス主義の鍵になる教義—これは今日極めて無批判的に受け取られている—がいかにかに、事実は合衆国と西欧における資本主義の発展によって超えられてしまつて久しい時代の産物であったか、を強調することである。当時、マルクスは「プロレタリア革命」の問題のみならず、ブルジョア革命、特にドイツ、スペイン、イタリア、東欧におけるブルジョア革命の問題に従事した。彼は産業革命の石炭—鉄鋼の工業技術以上には発展していなかつた資本主義諸国において、資本主義から社会主義への移行形態の問題を取り扱かつたし、また手工業とギルド・システム以上にはめつたに発展していなかつた諸国において、封建主義から資本主義への移行形態

の問題を取り扱った。これらの関心事を幅広く説明するために、マルクスは自由の諸条件（非中央集権化、コミュニケーションの形成、人間の規模、直接民主主義）よりもむしろ何にもまして、自由の諸前提条件（工業技術の発展、国家統一、物質的豊富）に従事した。彼の理論は生活の領域ではなく、生存の領域におもむきを降していた。一度この事が把握されれば、マルクスの理論的遺産を意味深い展望のもとに置くこと―この我々の時代に、その豊かな貢献をその歴史に限定された、実際に麻痺させ無力化させる手かせ足かせから分離すること―が可能である。マルクス主義の弁証法、史的唯物論によって与えられる多くの生産的な洞察、商品関係のすぐれた批判的経済理論の多くの本質要素、疎外の理論、さらに何にもまして、自由が物質的諸前提条件を持つ、という概念等々―これらは革命思想への絶えざる貢献である。

これで見れば、革命的変化の「力」としての産業プロレタリアートに対するマルクスの強調、階級社会から無階級社会への移行を説明するに際しての彼の「階級分析」、プロレタリア独裁の彼の概念、中央集権主義への彼の強調、資本主義発展の彼の理論（これは国家資本主義を社会主義とごた混ぜにする傾向がある）、選挙党を通しての政治行動の彼の擁護―これら及び関連する多くの概念は我々の時代の状況では誤りであるし、また我々が後に見るように、マルクス自身の時代においてさえも誤りに導くものであった。これらはマルクスのヴィジョンの限界から―より正確には、マルクスの時代の限界から―生じている。これらは、マルクスが資本主義を歴史的に進歩的なものとして、社会主義の発展に至る必要不可欠な段階として、看なした、ということをも人が記憶している場合にのみ意味をなす。

の必要が自己管理に基づいた社会的諸制度を害した。フランス革命期のジロンド党は、革命パリアを倒すために労働時間を利用し得る、と狡猾にも見抜いていた。区からラジカルな構成分子を排除するために、ジロンド党は、すべての集会の会議を午後十時前に、すなわちパリの労働者が仕事から戻る時刻前に、終わらせる法律を制定しようとして試みた。実際、それは過去の諸革命のアナキイな段階を終焉させた操作技術や「前衛」諸組織の裏切りであったのみならず、それは過去の諸時代の物質的限界でもあった。「大衆」はいつも労苦の生涯に戻ること強制され、革命の後も続く自己管理の機関をめぐって自由に確立できなかった。

しかしながら、バクーニンやクロボトキンのようなアナキストが、中央集権主義へのマルクスの強調及び組織についてのマルクスのエリート主義的概念の故に、マルクスを批判したことでは決して誤っていない。中央集権主義が過去の工業技術の発展のためには絶対に必要不可欠であったか。国民国家が商業の拡大のために必要不可欠であったか。労働者の運動が、高度に集中化した経済企業の出現と「不可視」の国家の出現によって利益を得たか。我々は、主に、資本主義が中央集権化した政治舞台内で発展したが故に、マルクス主義のこれらの教義をあまりにも無批判的に受け入れる傾向がある。前世紀のアナキストは、マルクスの中央集権的アプローチは、それが時代の事象に影響する限りは、ブルジョアジーと国家装置を非常に強化するために資本主義の打倒は極度に困難になる、と警告した。革命党は、これらの中央集権主義的、位階制的特徴を複写することによって、革命後の社会に位階制と中央集権主義をつくり出すだろう。

す。そして、これらは、特殊にドイツがブルジョア民主主義的任務と国家統一に直面していた時代に対してのみ実質的な適応性を持つ。（我々は、マルクスがこのアプローチを保持して正しかった、とは言わないようにしている、ただそのアプローチは、その時代と所において観られた時に、意味をなす、と言うようにしている。）

ロシア革命が、ボルシェヴィキ主義と衝突した「大衆」の地下水脈の運動を包含していたのと全く同様に、歴史には権威のあらゆるシステムと衝突する地下水脈の運動がある。この運動は唯一のアイデアオロギー、あるいは聖なる教科書類によって決して包摂されてはこなかったけれども、それは「アナキズム」の名の下に我々の時代に入り来た。アナキズムはいかなる形態の抑圧にも反対する人類のリビドー的運動であり、過去に逆のばれば、所有社会、階級支配、国家等のまさにその出現時にまで到り着く。この時以降、抑圧された者は社会秩序の自発的發展を拘禁しようとするすべての形態に反抗してきた。アナキズムは―歴史期から他の歴史期への主要な過渡期に社会的活舞台の前景にさつとどり出た。古代世界の衰微及び封建世界の衰微を見ても、権威、特権、抑圧等のあらゆるシステムの終焉を要求する大衆的運動のわき立ち、いくらかの場合には、性格上荒々しいディオニソスの大衆的運動のわき立ちがあったことが明らかである。

過去のアナキイな運動は、主に物質的貧窮、つまり工業技術の低水準の効用が人間の利益の有機的調和化を害したが故に、失敗した。物質的には高々貧困の平等を約束できるだけの社会は、特権の新しいシステムを復活する根深い傾向をいつも産み出した。労働時間を目に見えて減少し得る工業技術が欠如しているときには、労働

バクーニン、クロボトキン及びマラテスタは、アナキズムが一夜の内に確立され得る、と信じる程愚直ではなかった。この考え（一夜の内にアナキズム革命が実現するという考え）をバクーニンに負わせることによって、マルクスとエンゲルスはこのロシア人アナキストの思想を故意に歪曲した。かつまた、前世紀のアナキストは、国家の廃絶が、用語の反啓蒙主義的な（あいまいで解し難い）マルクスの選択を用いれば、革命後直ちに「武器を捨てる（降服するとの意味にもなる）こと」―これはまた「国家と革命」でレーニンが軽率に繰り返したことがある―を意味する、とは信じていなかった。実際、「国家と革命」で「マルクス主義」として通っている多くのことは、純粋なアナキズム―例えば、職業的軍隊の革命的（市民）軍による代替、議会的構造体の自己管理の機関による代替等―である。レーニンのパンフレットにおける真正のマルクス主義的なものは、「厳格な中央集権主義」の要求、「新」官僚制の受諾ソヴェエトと国家の同一視等である。

前世紀のアナキストは、「大衆」の革命的な精神を打ち砕いたり、解放に対して新たな障害を築いたりすることなく、産業化を達成する問題に深く心をとられていた。彼等アナキストは、中央集権化が革命に抵抗するブルジョアジーの力を強めるだろう、ということ、及び労働者の中に服従の意識を注入するだろう、ということ、及び彼等アナキストは、構造的な意味においてのみならず、精神的な意味においてもまた自由社会への跳躍台を提供するかも知れないあらゆる前資本主義的、コミュニケーション的形態（ロシアのミールやスペインのプエブロのような形態）を保護しようとした。それ故、彼等アナキストは資本主義の下でさえも非中央集権化の必要を強調し

た。マルクス主義諸政党とは対照的に、彼等アナキストの諸組織は、ブルジョア社会の人を卑しくさせる、凡庸化させる影響力に逆らうために、彼等アナキストが「総合教育」と呼ぶところのもの―全体の人間の発展―に相当の注意を払った。アナキストは未来の価値で生活することを、これが資本主義の下で可能である限度まで、試みた。彼等アナキストは「大衆」のイニシヤティブを助長し、逆逆の精神を保持し、自発性を鼓舞する直接行動を信じた。彼等アナキストは、統御が上から下へではなく、下から上へ発揮されるだろうところの相互扶助と兄弟的間柄に基づいた組織を發展させようと試みた。

我々は、たとえその主題が驚くばかりの量のくだらない考えによって曖昧にされてきた、という理由のみであっても、アナキズムの組織形態の性質を幾分詳細に調べるためにここで立止らねばならない。アナキスト、もしくは少なくともアナルココミニニストは組織の必要性を受け入れる。この点を繰り返さねばならないことは、マルクスが社会革命の必要を受け入れたかどうかについて論じねばならないことと同様に、馬鹿々々しいにちがいない。

(注) 「アナキスト」という用語は「社会主義者」という用語と同様に総称的な語であり、多くの異なった種類の社会主義者がいるのと同様に、多くの異なった種類のアナキストが多分いる。両者とも、その幅は、彼の考えが自由主義リベリズムの拡張から引き出される個人(個人主義的アナキスト、社会民主主義者)から革命的共産主義者(アナルココミニニスト、革命的マルクス主義者、レーニン主義者、トロツキスト)までの広がりを持つ。

達成しようと追求する。必要と周囲の条件に依存して、親和グループはこの有効性を集會、行動委員会、及び地方的地域的国家的な協議会等を通して達成できる。しかし、彼等アナルココミニニストは、自己完結する組織構造、実際の任務が完了した後も存続する委員会、「革命家」を心のこもらないロボットに化す「指導部」等の確立に頑強に反対する。

これらの諸結論は気まぐれな「個人主義的」衝動の結果ではない。全然反対に、それら諸結論は過去の諸革命、中央集権的政党が革命過程に加えてきた衝撃、潜在的な物質的豊富の時代における社会変化の性質等の厳しい研究から生じる。アナルココミニニストは、あらゆる偉大な社会革命を開始するアナキ、イ、な段階を維持し、拡張しようと追求する。マルクス主義者以上にさえ、彼等アナルココミニニストは、革命が深い歴史過程によって生み出される、ということを確認する。いかなる中央委員会も社会革命を「起す」ことはない。最良で、中央委員会はク、データ、を実行し、一つの位階制を他のもう一つの位階制で置き換えて得るだけであり、悪ければ、もし革命が何らかの広範囲な影響力を発揮すれば、中央委員会は革命過程を阻害する。中央委員会は権力の獲得、権力の再創出、「大衆」が自らの革命的努力で達成してきたところのものを中央委員会自身の手に刈り取めること等のための機関である。これらの本質的な諸事実を認識しないためには、誰でも過去二世紀にわたって起つて来たすべての事に盲目であらねばならない。

過去には、マルクス主義者は革命のアナキ、イ、な段階が物質的貧窮によって挫折させられたが故に、中央集権的政党の必要の(無価値ではあるが)理解され易い主張をすることができた。経済的に言

ここで起る真の問題は組織対非組織ではなくて、むしろいかなる種類の組織をアナルココミニニストは確立しようと努めるか、である。いろいろな種類のアナルココミニニズムの組織が共通に持っているものは、上から企まれて生み出された組織体ではなくて、下からの有機的な發展である。それらは、その生活様式が周囲のブルジョアの環境と区別ができず、そのイデオロギーが硬直した「確実な、試験済みのプログラム」に帰せられるところの政党ではなく、創造的革命的リベラリ生活スタイルを創造的リベラリ革命理論と組み合せる社会運動である。人間の力で可能な限り、それらは、位階制、階級、権威等の現行システムを奴隸的に模倣するのではなく、それらが達成しようとして追求する解放された社会を反映しようと努める。それらは従順な構成員によって太った、そして少数の全知の指導者によって上から操作される官僚的装置の周囲ではなく、その共同行動の能力がイニシヤティブ、自由^{アソシエーテッド}に到達する納得、深い人格的なかかわり合い等に基づいているところの兄弟姉妹の新密なグループ^{アソシエーテッド}親和グループの周囲に建設される。

アナルココミニニストはグループ間の調整、規律、細心な計画、行動の統一等の必要を否定しない。しかし、アナルココミニニストは、調整、規律、計画、行動の統一等が強制と上からの命令への心のこもらない、疑問をいだかない服従によってではなく、自由意志によって、つまり、説得と理解によって培われた自己規律の方法によって達成されねばならない、と信じる。アナルココミニニストは、中央集権主義に帰属されている有効性を位階制的、中央集権的構造の確立によってではなく、自由制と認識洞察の方法によって

えば、「大衆」はいつも労苦の日常生活に戻ること強制された。革命は十時に閉じられた。それは、一七九三年のジロンド党の意向は別にしても、そうであった。つまり革命は工業技術の低水準によって阻害された。今日この(革命を挫折させた)理由さえも貧窮―後工業技術の發展によって、特にアメリカ及び西欧においては除去されてきた。「大衆」がほとんど一晩中―最高段階の自己管理を達成するために必要とされる余暇の自由時間を獲得して―マルクス主義の意味における「自由の王国」をドラスティックに拡張し始め得る時点が、今や到達してしまった。

フランスにおける五月・六月事変が表示したものは、「大衆」の間におけるより高い意識性の必要ではなかった。パリは、組織がシステムティックに観念を―しかも観念そのものではなく、自己管理の概念を促進する観念を―普及させる必要がある、ということを表示した。フランスの「大衆」に欠如していたものは、中央委員会あるいは「大衆」を「組織し」、「大衆」に「命令する」レーニンのような人ではなく、「大衆」が単に工場を占拠するだけでなく工場を管理運営することができる、という確信であった。フランスにおけるた、一つのボルシェヴィキ型の政党として自己管理の要求を、かかげなかった、ということに注目する価値がある。その要求はアナキストと情況主義者によってのみかけられた。

革命組織の必要はある―しかし、その機能は常に明確に記憶されていないければならない。その第一の任務はプロパガンダ、つまりレーニンが表現したように「忍耐強く説明する」ことである。革命的情况の下では、革命組織は、もつとも進んだ要求を提示する。革命的組織は、事変のあらゆる時点で、革命プロセスを進展させるために

執られねばならない即刻の任務を—もつとも具体的な方法で—公式化する準備をしている。革命組織は、行動において、また革命の意志決定機関内部において、もつとも大胆な構成分子をなす。

それなら、一体全体アナルココミニズム・グループは、ボルシェヴィキ型の党とは異なっているのか。組織、計画、調整、あらゆる形態のプロパガンダ等の必要、あるいは社会プログラムの必要のような事柄に関しては確かに異なっていない。基本的に言えば、アナルココミニズム・グループは、誠実な革命家は党によってつくり出された形態内ではなく、革命によってつくり出された形態の枠組内で働かねばならない、という信念においてボルシェヴィキ型の党とは異なっている。この事が意味するのは、アナルココミニズム・グループは革命的「組織」ではなく、自己管理の革命的機関にコミットしている、ということ、つまり政治的形態ではなく、社会的形態にコミットしている、ということである。アナルココミニストは工場委員会、集会、あるいはソヴィエト等を支配したり、操作したり、全知の政党に引き寄せたりするのではなく、工場委員会、集会、あるいはソヴィエト等を促して大衆的自己管理の、真正の機関に自己発展させることを追求する。アナルココミニストは、これらの大衆的革命的機関の上に国家構造を構築すべく追求するのではなく、反対に、前革命時代に発展したあらゆる組織形態（アナルココミニスト自身の組織形態も含む）をこれらの大衆的な真正の革命的機関の中に分解消滅させようと追求する。

これらの相連は決定的である。ロシアのボルシェヴィキは、そのレトリックやスローガンにもかかわらず、決してソヴィエトを信用しなかった。ロシアのボルシェヴィキはソヴィエトをボルシェヴィ

念)等—解放的な、喜びに充ちたフェスティヴァルとしての革命—の意識を復活する試みである。

我々の時代の混乱するイデオロギー的ならゆる^{クオスカレイト}反対傾向の真只中で、一つの疑問が常に前景にとどまる—一体全体、我々は何のために革命を起すべく努めるのか。我々は位階制を改造するために革命を起すべく努め、人類の眼前に未来の自由のぼんやりした夢をぶらさげたままで置くのか。革命は工業技術的發展をさらに進めること、今日存在するよりもっと豊富でさえある品物を造ることなのか。革命はPLPを権力につけることか。あるいは共産党、社会主義労働者党等を権力につけることなのか。革命は「プロレタリアート」、「人民」、「歴史」、「社会」等のような抽象物を解放することなのか。

それとも、革命とは位階制、階級支配、強圧等を最終的に分解消滅すること—各個人が、自らの日常生活の支配力を得ることを可能にする、こと—なのか。革命とは各時機を可能な限り^{マイトラウス}すばらしいものにする、こと、各個人の一生涯をこの上なく十分に全とうされた経験とすることなのか。もし革命の真の目的がPLPのネアンデルタール人を権力につけることであるならば、それは起す価値がない。我々は、個人的發展が社会的及びコミュニン的發展から切り離され得るかどうか、についての内容空疎な問題をめつたに論ずる必要はない。明らかに二者は相伴って進む。全体の人間のための基礎は多面的な円熟した社会であり、自由な人間のための基礎は自由な社会である。これらの問題はさておき、我々は今なお、マルクスが一八五〇年にあげた問題—いつ我々は過去からではなく、未来から我々の詩を

キ党の道具と看なした。これは、フランスのトロツキストがソルボンヌ学生集会^{ソルボンヌ}に関係して忠実に模倣した態度であり、フランスの毛沢東主義者がフランス労働者連合^{フランス労働者連合}に関係して、旧左翼がSDS^{SDS}に関係して忠実に模倣した態度である。一九二二年までに、ソヴィエトは事実上死んだ、そして、すべての決定はボルシェヴィキ中央委員会と政治局によってなされた。アナルココミニストは、マルクス主義党がこのことを繰り返すのを阻止しようと追求するのみではない。彼等アナルココミニストは、自らの組織が同様の役割を演じるのを阻止しようとも望んでいる。従って彼等アナルココミニストは官僚制、位階制、エリートが自らの真只中から生れるのを阻止すべく努める。以上の事と同様重要なことは、彼等アナルココミニストは自らを改造しようと試みる。つまり、ほとんど誕生以来位階制的社会で同化させられてきた権威主義的特徴やエリート主義的傾向を己自身の人格から根だやしにしようとする。アナキズム運動の生活スタイルへの関心は、それ自身の全体性の先取であるのみならず、革命それ自体の全体性の先取でもある。^(注)

(注) アナキストのダダイズム、つまりPLP(進歩労働党)型の無表情な顔に仰天のしわをつくるアナキストの跳梁跋扈を動機づけるのはこの目標である、と我々はつけ加えてもよい。アナキストの跳梁跋扈は位階制社会から受け継がれた内的価値を粉碎すること、ブルジョア的の社会化プロセスによって注入された硬直を打破することを試みる。要するに、それは、自発性、想像力、感受性等を麻痺させるような効果を發揮する^{スプレッド}上位自我を打ち壊す試みであり、また欲望、可能性、非現実的^{マインベラウス}なすばらしいもの(シユルレアリストの概

得ることを始めるだろう)に面している。死者は死者を葬ることを許されねばならない。マルクス主義は、それが物質的貧窮の時代に根ざしていたが故に、物質的欠乏によってその可能性を制限されていたが故に、死んだ。マルクス主義の最重要な社会的メッセージは、自由が物質的諸前提条件を持つ—我々は生活するためには、生き残らねばならない—ということである。マルクスの時代のもつともとつびな科学フィクションによっても考えられなかった程の工業技術的發展によって、貧窮—後社会の可能性は今や我々の前に横たわっている。所有社会のあらゆる制度—階級支配、位階制、家父長的家族、官僚制、都市、国家等—は汲み尽されてしまった。今日、非集中化は人間の規模を復活する手段として望ましいのみならず、それは生活できる生態を再創造するために、地球上の生命を破滅的な汚染や土壤腐食から保護するために、呼吸のできる新鮮な空気と自然の平衡を保持するためにも必要である。もし社会革命が各個人に自らの日常生活の支配力を執らせるならば、自発性の奨励が必要である。

古い形態の斗争が階級社会の分解とともに絶体的に消滅するわけではない。それらは無階級社会の諸事象によって超えられる。労働者の獲得のない(労働者を説得しない)いかなる社会革命もあるはずがない。それ故、労働者が搾取に対して闘ういかなる斗争においても我々は積極的な連帯をしなければならぬ。我々は、社会悪が現われるところではどこでも、それに対して闘う、そして産業的搾取が深刻な社会悪である。しかし、人種主義、自己決定の権利の否定、帝国主義、貧困等もそれと同じく深刻な社会悪である—さらに、その事では、汚染、途方も無い都市化、青年に対する敵意ある社会

化、性的抑圧等も同じく深刻な社会悪である。労働者階級を獲得して（説得して）革命を起させる問題に関しては、我々は、ブルジョアジーの存在のための前提条件がプロレタリアートの発展である、ということ銘記しなければならない。社会システムとしての資本主義は、両階級の存在を前提とするし、両階級の発展によって永続化させられる。我々は、我々が非ブルジョア階級の脱階級化を少なくとも制度的に、心理的に、文化的に助長する程度にまでは、階級支配の諸前提を掘り崩し始めている。

歴史上始めて、過去のあらゆる偉大な革命を開始したアナキイな段階が我々の時代の発展した工業技術によって永続的状态として維持され得る。その段階のアナキイな諸制度―集会、工場委員会、行動委員会等―が解放された社会の構成要素として、自己管理の新たなシステムの構成要素として、安定させられ得る。我々はそれらを守り得る運動を創出するか。我々はこれらの革命的諸制度に分解消滅する能力のある親和グループの組織を創出し得るか。それとも、我々は、それらを支配し、それらを押しつけ、最後にそれらを破壊すべく努めるだろう位階制的、中央集権的、官僚的政党を創出するか。

マルクス主義者よ、聞け！ 我々が創出すべく努める組織は、我々の革命が創出するだろう種類の社会である。我々が―我々のグループにおいては勿論、我々自身においても―過去を流し出すか、あるいは獲得すべき未来は単に何もなにか、のどちらかである。